

# St. Luke's International University Repository

## 学生生活の実態（調査報告）:(その1)学生生活一般

|       |                                                                                                                                 |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2007-12-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 常葉, 恵子, 津嶋, 優子, 熊田, 洋子, 木下, 幸代<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10285/87">http://hdl.handle.net/10285/87</a>                                                     |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



本調査は昭和50年の2月の終りから3月のはじめにかけて1年生から4年生迄全員に対して行なった。

今回はこの結果を、学生生活一般、実習に対する意識・看護に関して、と三つにわけ、大まかに分析し、考察を加えたものである。

時代は刻々とうつり、学生の生活も、大学の体制も変

ってきているので、早くも現代学生の実態からずれている部分もあるかも知れない。

この資料は不完全なものであるが、今後の学生の指導に、又カリキュラムの刷新に少しでも役に立つことができれば幸いである。

## (その1) 学生生活一般

常 葉 恵 子      津 嶋 優 子  
熊 田 洋 子      木 下 幸 代

### はじめに

第一部は今回の調査に対する回答のうち、学生生活の一般的事項に関係のあるものを、「学生生活一般」としてまとめた。その内容を7項目に分類し、まとめ考察を試みた。

1. 本学受験の動機と学生生活の目的意識
2. 勉学への姿勢
3. 大学への意見と要望
4. 学生気質と悩み
5. アルバイト・サークル活動
6. 日常生活
7. 健康状態

本稿で使用した「一般女子学生」および「昼間部一般学生」とは、日本私立大学連盟編第2回「私立大学学生生活実態調査報告書」(1972年11月)にのべられているものである。

### 調査結果

#### 1. 本学受験の動機と学生生活の目的意識

学生は本学受験の動機として「将来の就職を考えて」選択した者が51.6% (一般女子学生7.8%) と過半数を占め、続いて「大学の特色・学風にひかれて」14% (一般女子学生22.9%)、  
「近親者のすすめ」9.6%である。又一般女子学生が、私学受験を「他を不合格となった時のすべり止めとして」19.5%考えているのに比較し、本学においては2%と少なく、目的意識がいっそう明確といえるかもしれない。これは看護を志した動機の間に対して、将来の就職、経済的自立、女性の職業としての誇りが過半数を占めていることと深く関連している。

このように比較的明確な動機をもって入学した本学学生が学生生活のなかで、どのような目的意識をもっているかを調査してみると、第1位にあげたものは「豊かな教養を身につけ、人格を陶冶する」33.3% (一般女子学生38.1%)、  
「専門的知識・高度の技術の習得」13% (一般女子学生13.1%) が上位を占めている。また、他大学と同様に「大学卒の学歴が欲しいため」は0%である。

#### 2. 勉学への姿勢

学生の勉強態度には学年による傾向の違いがみられるが、全体としては、「授業・試験を要領よくこなし、人生・社会の問題にとりくむ」30.3% (一般女子学生19.7%) が第一位にあげられ、次いで「授業に殆ど欠かさず出席し、着実に単位を習得」24.7% (一般女子学生37.1%)、  
「ただ何となく過している」24.7% (一般女子学生17.9%) となっており一般女子学生と比較し、第一位、第二位の逆転がみられる。積極的に研究にとりくむという学究型は少なく、与えられたものを着実に要領よくやってゆくという日本人の勤勉さが案外多いことがわかる。これは当時のカリキュラムでは、一週間の授業時間がほぼ44時間と過密であり、これらの回答はそのためによるところが大きいと思われる。

学生生活の充実の度合については「まあまあといったところ」43.1%と第一位を占め、「余り充実していない」31.3%が続いている。

全体的に充実度が低いことは、大学生の一般的な傾向ともいえる。「空疎でいたたまれない」と答えている学生が全体で9名いる。しかしこの間の「学生生活」を学生がどのような意味で回答したかは不明確であり、これらの回答が一概に問題があるとはいいきれないものを含んでいる。

授業に対する学生の満足度をみると、学生の不満がかなり大きいことがわかる。「満足・不満足半々」40.1%

が第一位を占め、次いで「大部分不満足」36.4%となり「満足」と答えた者は「大部分満足」を含めても13.6%にすぎない。

### 3. 大学への意見と要望

本学の建学の精神的基盤であるキリスト教に対する学生の考え方としては、「積極的支持」あるいは「建学の精神としては良い」としている者が62.6%、「無関心」29.7%、「反感を感じる」6%である。

学生が大学に対して望んでいることの第一位は「カリキュラムの改革」50.0%（一般女子学生19.4%）であり、次いで「教師陣の充実」30.2%（一般女子学生26.4%）があげられている。回答を順位別に3:2:1の割合で重みづけを行なってみると、「カリキュラムの改革」36.7%、「教師陣の充実」23.5%、「施設の充実」11.6%となる。要約するとカリキュラム、教育方法の改革、教師陣の充実といった直接的教育に関連した項目が88.7%と大半を占めている。これは授業に対する満足度が低かったこととも関連するものである。

教師に対しての要望、期待としては、「研究者であるとともに良き教育者」34.6%（一般女子学生25.8%）、「講義内容の充実」30.2%（一般女子学生29.0%）が上位にあげられ、「学生と教室外での個人的接触、対話」を望んでいる者は一般女子学生の22%と比較して14.2%とやや少ない。看護関係教師に対する態度とそれ以外の教師に対する態度とのあいだの差は明らかではない。

### 4. 学生気質と悩み

本学学生が、他大学在学中の友人と比較して自分自身をみた場合、「交際範囲が狭い」と答えた者は、各学年とも多く、全体の91.4%を占めた。その他の意識、態度の比較においては、「専門職業人としての自分や職業・階級体制などに関心」があり（86.4%）、また「経済的に独立しようとする気構え」が強く（75.3%）、「人間愛や人類愛」が強い（67.3%）と答えた者が多い。

友人関係をみると、尊敬する友人がいると答えた者は58.6%、いないと答えた者は39.5%であり、1年生の場合は、いると答えた学生は少なく、半数を少し欠いている。

多くの学生（40.1%）が、不安・悩みとしてあげたものは、「自分の性格・能力」である。これは、特に1・2年生に多く、3・4年と学年がすすむにつれて「就職・将来について」が大きな悩みとなる傾向がみられる。看護を選んだということで、自分に必要とされる能力や、好ましい性格が明確であるため、多くの学生の悩みとなっていると思われる。次に多いのが、「勉学上のこと」

「人生観について」であり、各々約11%であった。質問は、「その他」を含む12項目の回答から、順位をつけて3項目以内を選ぶようにしたが、全く悩みのない学生（3.5%）、悩みは1つだけ（3.9%）、2つだけ（5.3%）の学生もあり、全体からみて、私大連盟の調査と比較すると

第1位に選んだもの一性格・能力 21.6%

（一般女子学生27.8%）

第2位に選んだもの一就職・将来 12.8%

（一般女子学生20.3%）

第3位に選んだもの一人生観 10.9%

（一般女子学生14.5%）

第4位に選んだもの一勉学上のこと 10.7%

（一般女子学生16.7%）

となり、多くの学生の悩みの内容は同じ傾向であるが、百分率での比較は、どれも低い傾向を示している。

次に、悩み事の相談相手を見ると、友人が最も多く58.9%、肉親が18.6%、教師は1.9%にすぎない。

相談内容からみると、「性格・能力」「勉学上のこと」「就職・将来について」は、学内の友人に相談する人が多く、「人生観について」は学外の友人に相談する人が多い。また全体で14.3%の学生が、相談相手はなしと答えているのが注目される。

### 5. アルバイト・サークル活動

#### 1) アルバイト

本学では、ほとんどの学生（96.3%）がアルバイトをしたことがあり、過去一年間において、長期休暇中に行なった学生は43.1%、週何日か定期的に行なった学生は44.1%、不定期に行なった学生は12.8%であった。定期的にと答えた学生が週何日アルバイトをしているかをみると、週1回が43.9%、週2～3回が51.2%、ごく少数の学生が週4～6回している。

アルバイトの動機について記載された結果は、次のとおりであった。全体の69.8%の学生は収入を得るためと答えており、その用途は旅行・レジャーのためが多く、本代その他の学用品が次にあげられている。この収入を得たいという動機は1・2年生では70%を少し越えており、4年生では57.1%という差がみられた。約13%の学生は、学習のためと答えており、「臨床看護の経験」「実習病院以外の病院を知るため」あるいは「社会勉強のため」と言っている。残りの17.4%の学生は「暇だから」「アルバイトに興味があって」「頼まれて」等の理由であった。

職種は、看護婦（助手）50.9%、販売（サービス業）

43.6%、事務関係25%、家庭教師9.6%であった。学年別の特徴をみると、1・2年生では看護の学習が進んでいないせいか、販売（サービス業）が第一位で、次が看護婦（助手）であるが、3・4年生ではその逆の順位である。

## 2) サークル活動

学内のサークル活動には、59.6%の学生が参加していた。活動していない残りの学生の中には、名目上は参加しているが活動していない者（15.6%）、以前参加していたがやめた者（21.7%）が含まれている。学年別に見ると、現在活動している学生は、2・3年生に多い傾向がみられる。

学外のサークル活動への参加は、過半数の学生が経験しており、34.4%の学生が現在も活動している。参加団体をみると、スポーツ、音楽等のサークルよりも、ボランティア活動、医療問題、宗教関係の研究やフィールド・ワークを中心としたグループへの参加が、各学年とも多く認められる。

## 6. 日常生活

### 1) 住居

住居は、昭和48年度入学生（2年生）から学寮の制度がなくなったため、3・4年生では自宅15%、学寮60%であるのに対し、1・2年生では、自宅が39%となっている。しかし、自宅通学生の割合は、昼間部一般学生では51.7%であり、本学ではその割合が低い。

### 2) 日常生活費

日常生活費については、全学生を①自宅外（下宿、アパート等）から通学している学生—70名、②自宅から通学している学生—44名、③本学の寮生（3・4年生のみ）—47名の3グループに分けて集計した。

自宅外通学生の家からの仕送り額のメディアンは一カ月平均44,516円であり、「3万円以下」は8.6%、「6万円以上」は10%とわずかで、4万円台を中心に「3～6万円」が多い。

住居費（部屋代・光熱費）のメディアンは14,643円であり、「1～2万円」が72.9%と多い。

自宅外通学生の食費のメディアンは一カ月平均16,071円であるが、1年生—17,083円、4年生—14,063円と、上級生の方が少ない傾向がみられる。1日平均では536円となり、学校での昼食は120円と安価なので、自炊ならば特に無理のない金額だと思われる。（1年生が行なった「1日の食事の栄養分析」\*の結果をみても、栄養

学的に片寄った食生活をしている学生は、わずかであった。）

自宅通学生の1カ月平均の小使いの額は、「1万円以下」が70.5%、「1～2万円」が25.0%であった。

寮生の家からの仕送り額のメディアンは1カ月平均26,250円であり「2～4万円」が多い。

\* 看護学原理における演習で学生が各自、自分の食生活を分析したもの。

### 3) 家庭の職業

父親の職業は「会社員、公務員」が61.7%、母親は「無職（主婦）」が52.5%と過半数を占めている。また、父親—「医師またはその他の医療関係者」7.8%、母親—「看護婦（保健婦、助産婦）」10.1%がめだっている。

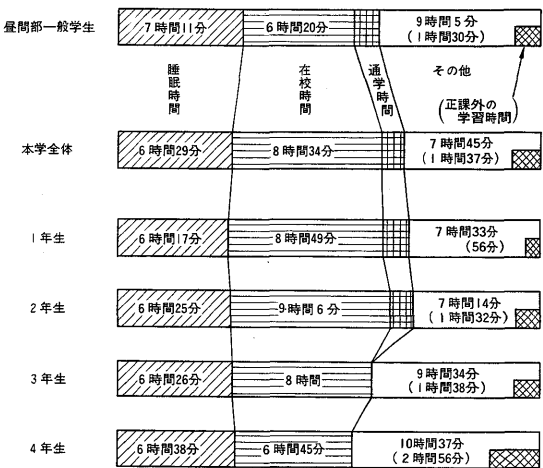
### 4) 生活時間

生活時間に関しては、「私立大学学生実態調査」を参考に、1日平均の①睡眠時間、②在校時間、③通学時間、④平日の正課外学習時間、および⑤週末の正課外学習時間の5項目について調査した。

結果は図1のとおりである。

本学の学生の睡眠時間は、昼間部一般学生と比較して約40分短い。睡眠時間のメディアンは6時間29分であり、24.1%の学生は、6時間以下の睡眠しかとっていない。

図1 生活時間



注 1) 3・4年生は寮生が半数以上のため通学時間は省略した。

2) 正課外学習時間には、在校中の学習時間も含まれている。

3) 数値はすべて、それぞれのグループのメディアンを示している。

在校時間は非常に長く、特に1・2年生では9時間に及び、極端に短い学生はいない。3・4年生の在校時間がやや短いのは調査時期が学年末のゆとりのある時だったためであろう。

平日の正課外学習時間は、昼間部一般学生とほぼ等しいが、1年生は約30分短い。4年生の学習時間が長いのは、学期末試験、国家試験をひかえていたためと思われる。

週末の正課外学習時間のメディアンは、1年生—1時間26分、2年生—2時間52分、3年生—1時間23分、4年生—2時間47分であった。平日の学習時間と比較すると、1年生で30分、2年生で1時間20分長いのに対し、3・4年生では平日よりもやや短い。

これを個人別にみると、最も多いタイプは平日も週末も平均的に学習する学生である。1年生では、よく学習する学生と、全然しない学生の差がはっきり現われている。また、3・4年生では、平日のみ学習し週末は全然しない学生が20.8%いる。これは時間の使い方の変化よりも、寮生が多いので、平日の学習時間が多くとれるためと思われる。

## 5) アルバイトと生活時間

アルバイトと生活時間の関係については、1・2年生82名を、アルバイトの回数により、3つのグループに分けて分析した。(3・4年生は、生活時間を作用する因子が異なるので、除いた。)

結果は図2のとおりである。

在校時間、睡眠時間、通学時間については、各グループ間に特徴的な差はないが、正課外の学習時間については、週末、平日とも、アルバイトをしているグループの方が短い傾向がみられる。

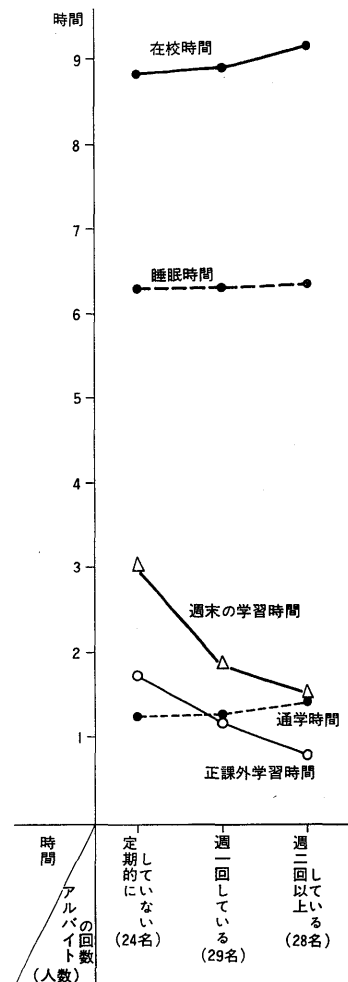
## 7. 健康状態

現在の健康状態については、全体で $\frac{1}{4}$ の学生が「あまり良くない」と答えている。また、入学後の健康状態の変化については、「悪くなった」と答えた学生が全体で39.5%、特に2年生と4年生では半数以上が「悪くなった」と答えている。具体的には、「疲れやすい」「風邪をひきやすい」などがあげられている。

健康を維持するために心がけていることとして答えたものを多い順に列記すると以下の通りである。

- ① 自分の性格をつかみ、客観的に自分をみるように心がけている。—53.7%
- ② 意識的にバランスのとれた栄養をとるように心がけている。—52.5%
- ③ 週3回以上入浴している。—48.1%

図2 アルバイトと生活時間



④ 規則正しい食生活をするように注意している。—43.8%

⑤ 心配ごととは自分の中にとじこめないよう友人やその他の人に話してアドバイスを受けたりする。—40.1%

## 考 察

まず学生の勉学の態度と大学に期待するものについて考察すると、入学の時点で「入学の動機」が明確であるものが他大学学生よりはるかに多いのが特徴としてみられる。しかし入学の動機が明確であり、また在学時間が長いにもかかわらず、勉学の態度は自主的、積極的な態度が低い。また学生の半数以上がカリキュラムの改革をのぞみ、授業に対する満足度が低い。これらのことは現在の学生気質によることもあろうが、一週間の授業時間

がほぼ44時間という過密であることに問題があるのではなからうか。また授業内容については課題が多すぎるのではなからうか。カリキュラムの改定、授業内容、授業の方法の再検討が必要であると思われる。授業や大学に対する学生の希望や期待が全て満足されうるものでもなく、またその希望が全て妥当なものであるとは限らない。しかし入学の動機や目的意識が明瞭であることを考え、できるだけ充実感を与えたいものとする。また大学における学習がどのようなものであるかが理解できなければ、いかにカリキュラムを改定し授業内容をととのえたとしても学生は満足しないであろう。大学における学習は与えられるものでなく、自分から学習するものであることを認識させることが最も重要な課題であろう。

次に学生気質と正課外の学生の活動をみると、学生の気質は他大学学生と殆んど同じ傾向と思われる。ただ自己をみつめた時に、「交際範囲が狭い」と感じている学生が多いのが目立つ。これは本学が単科大学であり、また目的が「看護」と明確なためであろう。学生自身目的をもっているのであるから、この「狭さ」を消極的な意味でとらえるのではなく、どのように深め、また広げるかを指導したいものである。また学生の悩みについては、その内容の傾向は他大学学生と同じであるが、百分率では低い傾向を示している。これは学生の将来への目的意識が他大学学生より明確なためと思う。相談相手として友人が最も多く、教師は1.9%にすぎないのは、この年代としては当然であろう。しかし教師としてどうあるべきか、また学生課の窓口が学生の相談相手となるためにはどのように準備したらよいかを考えることは大切であると思う。

学生の課外活動では、学外のサークル活動に参加している学生が他大学学生より多く、その種類も、スポーツ、音楽などの団体への加入より、ボランティア活動、医療関係、宗教関係が多いが、これは看護を学習している学生としての特徴であろう。また欠席や遅刻の多い学生のなかには、その理由をサークル活動のためとする学生がいる。

学生の日常生活について考察すると、アルバイトについては殆んどどの学生がアルバイトを経験している。その目的は「学費の一部とする」はほとんどなく、相当多目的である。本学生課が昭和50年1月に行った「奨学金に

関する実態調査」からみると全学生のうち奨学金をうけている学生は26名である。奨学金をうけていないものなかで定期的にアルバイトをしているものは23名で、していないものは111名であった。その23名のうちで奨学金をうけたいとするものは8名であり、いらなくとするものが15名となっている。(アルバイトをしていない学生111名中奨学金を希望するものは17名である。またこの調査でのアルバイトは学業を続けるためにアルバイトをしているかとの問いかけであった。)この数字から推測しても、学業のためのアルバイトは比較的少なく旅行とか、その他の目的が多いように思われる。

生活費については数字が示す通りであるが、自宅外通学生について家からの仕送り額を生活費と考えたと、同じ時期の他大学学生との比較する数字をもたないが、49年11月に行った文部省の調査によれば、私立大学昼間部の学生の生活費が年額366,300円となっており月額にすると約35,000円となる。物価上昇を考えると大体他大学学生と同じと考える。

生活時間のなかで、他大学学生と比較して在校時間が長いこと、睡眠時間が短いことがあげられる。これは授業時間、実習時間などが多いためと思われる。睡眠時間が短い生活が続けば健康上の問題がおり、また学習態度にも疲れがでて授業にただ出席するということになる。

健康については、あまり良くないと思っている学生が多いが、身体検査の結果として特に問題になる学生はいないことから、自覚的に疲れて訴えているのだと考えられる。しかし健康の維持のために個人衛生を守っていこうとする学生が半数以上あることは、看護を学習するものとしての特徴であろう。

## おわりに

本学の学生の学生生活一般についての傾向は他大学学生との大きな差はみられないが、大学の目的が明確であること、カリキュラムが過密であることなどからくる特徴がみられ、学生生活は一般大学生より忙しいことがよみとれる。その結果、余裕のない、充実感の少ないものとなり自学自習の傾向が低く、きめられたものをこなすといった態度がみられるのではないか、この点を充分に考え改良する必要があると考えた。